

子どもの学校適応と親子のソーシャル・ネットワーク

佐藤 勢子

福山大学大学院人間科学研究科

キーワード：ソーシャル・ネットワーク，コンボイ，学校適応，ソーシャル・サポート

はじめに

人は、家庭、学校、地域社会、職場など、周囲の人々とかかわりを持ちながら生活している。本来子どもたちは、家庭、学校、地域で社会性を育み、子どもたちは、家庭において親とのやりとりの中で、受容され、大切にされているという感覚を通して自分や他者への信頼感を身につける。しかし、核家族化や地域社会が崩壊する中では、関わる人の数も減少し、人と人の絆も弱まる傾向がある。牧野（2001）によると、家族の小規模化が、子どもの人とかかわる力を弱めている。また、子どもたちはいろいろな世代、年齢、いろいろな特徴をもつ人々と暮らす経験が著しく少なくなっており、子どもが人とかかわる力（社会性）が弱くなっていると考えられている。

このように社会性の希薄な子どもたちの中には、学校に適応できず不適応状態をおこし、不登校状態になっている者がいる。つまり、それらの子どもたちは、集団の中に自分の存在を感じできなかつたり、集団の中に予測する自分の役割行動が実現できず、または、集団の中で役割行動が発揮できないと感じて、本来の自分の個性を引き出せないでいることで、自己実現に向かう働きが停滞しているのである（福島県教育センター，1994）。そのような、学校に適応できない子どもたちは、対人関係やソーシャル・スキルの未熟さを抱えている場合が多い。従来、子どもの問題や学校不適応は子どもの性格や母子関係に帰されることが多かったが、子どもの発達に影響を与える要因は幅広く、Bronfenbrenner（1996）によると、生活環境が構造化された異なった4つのシステムがかかわっていると考えられる。それぞれのシステムは、マイクロシステム、メゾシステム、エクソシステム、マクロシステムであり、これらの相互作用によって子どもたちは発達すると考えられる。伊藤（1985）によれば、マイクロシステムにおいて発達の相互性、たとえば子どもが発達すれば母親が変わり、母親が変われば子どもも変わるという現象が見られるように、マイクロシステム（子ども集団）とエクソシステム（指導者集団）との間にも、いわば集団の発達の相互性という現象が観察されると言われている。そのため、乳幼児期の子どもの育つ環境を、母子だけの密室育児から多くの多様な人びとと接することのできる環境へと変えていくことが急がれる課題である（牧野，2001）。

本研究では、子どもの学校適応を、子どもをとりまく人間関係（ソーシャル・ネットワーク）の量的・質的側面から検討する。ソーシャル・ネットワークとは、家族、友人、その他からなる個人ネットワークである。さらに子どものソーシャル・ネットワークは、子ども自身の人間関係だけでなく、身近な存在である親のソーシャル・ネットワークによる影響を受けると考えられる。たとえば、父親の会社の人間関係や母親の友だち関係は、子どもが直接参加するわけではないが、子どもたちに間接的に影響を与えていると考えられる（鶴，2007）。また、高橋（2007）は、ライフ・サイクルによって変化するソーシャル・ネットワークの力動的な性質を表現するために、コンボイという概念を採用している。そして、コンボイは、養護的な機能を持つとともに、もっと広い視野の愛着理論にもとづいていると述べている。

ところで、ソーシャル・ネットワークの量的・質的側面を把握する方法として、高橋（2007）も採用しているコンボイの考え方がある。Kahn & Antonucci（1980）は、文化人類学者 D.W. プラースの考え方を継承し、ソーシャル・ネットワークに関連してコンボイ・モデル（convoy model）を提唱した。コンボイとは、本来護衛艦のことであり、船が船団を組んで航海するとき、戦艦が周りを何隻もの護衛艦にかこまれ、守られていることになぞ

らえて、個人のネットワークの構造を表わすのに用いられた。また、高橋（2007）によると、コンボイは乳児期の中核的な愛着関係から出現し、子どもがより広い社会領域に入るにつれて、他の重要な関係をも取り込んで広がっていきと考えられている。つまり、コンボイとは、人を中心とするネットワークであり、その成員間で社会的支えが与えられたり、受け取られたりする構造である。池澤（2005）によると、コンボイとは、サポートが提供されたり、受けとられたりするソーシャル・サポートのネットワークのことである。コンボイ・モデルでは、中心に近いほど強い縁で結ばれ、長期にわたって関係を維持し続ける者と規定され、そのように内側の同心円にいる人ほど、個人にとって安定したサポート源であるとされている。最も中心の円は、その人自身であり、その周りにある3つの同心円はその人のコンボイを表わす（図1、図2）。

そこで本研究では、子どものネットワークと親のネットワークが子どもの学校適応にどのような影響を及ぼしているのかを検討するため、コンボイモデルを使用し、コンボイに出現する人たちの量的と質的観点から検討する。

方法

参加者 H県F市の公立小学校の4年生137名（男子68名、女子69名）、5年生138名（男子67名、女子71名）、計275名、および児童の保護者275名、回答数は児童261名（96%）、保護者167名（60.7%）であった。親の調査の回答者は、167人（60.7%）、その内157人（94%）が母親であった。また、親の有職者（正規・非正規）は147人（83.5%）であった。親の年齢は最小値27歳、最大値47歳、平均値38.3歳であった。参加者の家族構成は、核家族が154世帯（59.7%）、三世代家族が71世帯（27.5%）、ひとり親家庭が14世帯（5.4%）、一人親とその親と同居しているのが10世帯（3.9%）であった。

調査時期 2008年7月に実施した。

調査内容 1. **コンボイ** 三つの円（第1円 直径7.5cm、第2円 直径10.5cm、第3円 直径13.5cm）と、その中心に直径1センチメートルの円を描いてあるA4の用紙を用いた。「真ん中の円を自分だと思ってください。あなたにとってもっとも安心でき、もっとも助けてくれる人を一番内側の円に、その次に安心でき、助けてくれる人を2番目の円に、さらにその次に安心できる、助けてくれる人を3番目の円の順番にシールを貼ってください。男性には青色のシール、女性にはピンク色のシールを貼ってください。また、それが誰であるかシールの下にあなたとの関係を書いてください。」という教示を与えた。シールは青色20枚、ピンク色20枚を配布した。

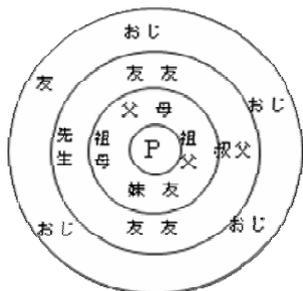


図1 子どものコンボイの例

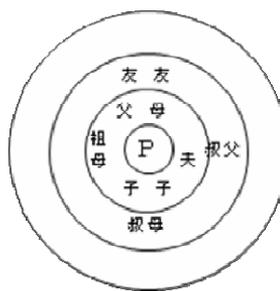


図2 親のコンボイの例

2. 学校適応

児童には、小学生用学校不適応感尺度（戸ヶ崎・秋山・嶋田・坂野，1997）15項目に基づき、小学生の学校適応感を求めるため一部修正し4件法（1：ぜんぜんあてはまらない～4：よくあてはまる）で評定を求めた。

3. 属性に関する質問

児童には、学年、年齢、性別、家族構成を、保護者にはそれに加えて、職業の有無、地域活動についてたずね

た。

手続き 親子のペア・データが入手できるように、児童用調査票と親用調査票に同一の通し番号をつけた。児童には授業時間の一部を拝借し、調査者自身が出向いて学年ごとに行った。親用調査票（封筒に入れたもの）は児童が家庭に持ち帰り、家庭で記入後、児童を通じて担任に提出してもらった。調査票には、児童、親とも無記名で個人が特定されることはないこと、研究目的にのみ回答データを用いることを明記した。

結果

1. 子どもの学校適応

小学生用学校不適応感尺度に対する15項目の回答に対して、平均値、標準偏差を算出し、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、4因子が得られた。戸ヶ崎・他（1997）の研究では3因子が得られたが、本研究では4因子構造を示す結果となった。その中から十分な因子負荷量を示さなかった1項目を分析から除外し、残りの14項目に対して、再度、主因子法・プロマックス回転因子分析を行った。その結果を表1に示す。

表1 学校適応の因子分析結果

	平均 (SD)	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV
14 勉強なんかどうでもよいと思っていますか。(逆)	3.16 (1.03)	.76	-.03	-.05	-.04
15 早く授業が終わらないかと思うことがあります。(逆)	2.07 (1.03)	.69	-.05	.04	-.15
12 きらいな授業がある日には学校を休みたくなります。(逆)	2.90 (1.20)	.65	.05	.15	-.06
11 勉強をやる気がしなくて、もうだめだと思えますか。(逆)	2.96 (1.00)	.47	.02	.03	.17
13 テストのことを考えるといやでたまらなくなります。(逆)	3.33 (1.00)	.45	.08	-.13	.21
7 先生は、なんでもよくわかるように教えてくださいませんか。	3.43 (.79)	-.06	.78	.08	-.03
6 先生は、あなたのいうことをよく聞いてくれますか。	3.26 (.92)	-.01	.71	.02	-.08
8 先生は、あなたが失敗してもばかにしないで親切に教えてくださいませんか。	3.59 (.82)	.03	.61	.05	.00
10 先生は自分の考えをおしつけすぎずだと思いますか。(逆)	3.14 (.94)	.09	.45	-.21	.12
1 あなたは、クラスの友だちから好かれていると思いますか。	2.83 (.82)	-.06	-.04	.77	.07
3 友だちは、あなたのことを信用していると思いますか。	3.20 (.84)	.12	.07	.49	.03
5 あなたのクラスにはあなたの失敗を喜ぶ人いますか。(逆)	3.39 (.83)	-.07	.02	.01	.50
2 あなたはこのクラスでのけ者にされているような気がしますか。(逆)	3.41 (.91)	-.05	-.03	.12	.49
4 友だちはよくあなたの悪口を言っていると思いますか。(逆)	3.18 (.91)	.10	-.05	.02	.44
注):(逆)は逆転項目	累積寄与率	25.35	37.85	48.02	56.12

第1因子は、「勉強なんかどうでもよいと思う（逆転項目）」、「早く授業が終わらないかと、思うことがある（逆転項目）」、「嫌いな授業がある日には、学校を休みたくなる（逆転項目）」、「勉強をやる気がしなくて、もう駄目だと思う（逆転項目）」、「テストのことを考えると、いやでたまらなくなる（逆転項目）」の負荷が高く「学業場面」因子と命名した。第2因子は、「先生は何でもよく分かるように教えてくれる」、「先生はあなたの言うことをよく聞いてくれる」、「先生はあなたが失敗してもばかにしないで親切に教えてくれる」、「先生は自分の考えを押しつけすぎずと思う（逆転項目）」が高く負荷したことから、「先生との関係」因子と命名した。第3因子は、「あなたはクラスの友達から好かれていると思う」、「友達はあなたのことを信用していると思う」の負荷量が高く「友達受容度」因子と命名した。第4因子は、「あなたのクラスにはあなたの失敗を喜ぶ人がある（逆転項目）」、「あなたはクラスでのけ者にされているような気がする（逆転項目）」、「友達はよくあなたの悪口を言っていると思う

（逆転項目）」の負荷量が高かったことから「友達との関係」因子と命名した。

4 因子をもとに下位尺度間の関係をみるため、Pearson の相関係数を求めた。下位尺度間の相関は、「学業場面」と「先生との関係」には正の相関 ($r=.43, p<.01$)、「学業場面」と「友達の受容度」にも正の相関 ($r=.17, p<.01$)、「学業場面」と「友達との関係」にも正の相関 ($r=.17, p<.01$)、「先生との関係」と「友だちの受容度」にも正の相関 ($r=.15, p<.05$)、「友だちの受容度」と「友だちとの関係」にも正の相関 ($r=.20, p<.01$) がみられた。

すなわち「学業場面」において適応できていると感じている子どもたちは、先生や友だちと良い関係をもっていると感じ、友だちにも受容されていると感じていると言える。

2. 子どものコンボイと学校適応との関係

まず、子どもが描いたコンボイの例を図1に示す。子どものコンボイの特徴を見るため、第1円、第2円、第3円に出現する人数からそれぞれ度数分布を分析した。次に、各円に出現する人数と学校適応の関係を検討するため、各円に出現する人数と学校適応との相関係数を調べた。また、子どもたちにもっとも身近で、もっとも信頼できる人を第1円に出現させるだろうと考え、子どものコンボイの第1円のタイプと学校適応の関係を検討した。

(1) 子どものコンボイの特徴

Kahn & Antonucci (1980)によれば、第一の同心円に出現する人々は、子どもたちにとってきわめて親密で、信頼できる人々である。また、その人々は子どもたちにとって重要な支えの提供者として認識されていると考えられている。特に何人かの家族がここに含まれる可能性が高いと考えられている。第1、第2、第3の同心円にどの程度の人数の子どもたちが出現させ、自分の周りにいる人を認知できているかを把握するために度数分布図を分析した

第1円に登場する人数は、平均5.57人 ($SD=2.32$)、4人、5人を最多としほぼ正規分布をなしている。また、第2円においては、平均5.53人 ($SD=3.15$)、6人を最多とし左肩は比例的に増加し、右肩は急に減少を示す。第3円においては、平均2.42人 ($SD=2.78$)と出現数0人が77人(約30%)いた。第3円には77人が誰も出現させなかった。0人を最高に右肩下がりである。合計人数では、平均13.51人 ($SD=5.44$)である。また、人の種類としては、第1円には両親、兄弟、祖父母が出現し、第2円には祖父母、友だち、先生、叔父さん、叔母さんなど周りの大人が出現する。つまり、第3円に出現する人は、子どもたちにとって親密さの程度が低く、支えとして感じられる人が認識できなかったと考えられる。

(2) 第1円、第2円、第3円の人数と学校適応との相関

各円に出現する人数の多さと学校適応の関係を検討するため、学校適応の下位尺度得点および合計得点と子どものコンボイの第1円、第2円、第3円の出現人数との相関を検討した。子どものコンボイでは第1円に出現する人数と「友だちの受容度」において正の相関 ($r=.18, p<.01$) がみられ、第2円の出現人数と「友だちの受容度」にも正の相関 ($r=.18, p<.01$) がみられた。また「友だちとの関係」においても、正の相関 ($r=.13, p<.05$) がみられた。しかし、第3円の出現人数と下位尺度得点には、相関関係はみられなかった。また、学校適応の合計得点と各円に出現する人数にも相関関係はみられなかった。これらのことから、第1円、第2円に出現人数が多い場合は友だちに受容されていると感じていることがわかる。

(3) 第1円のタイプと学校適応との内訳

第1円には子どもたちがもっとも身近に感じ、もっとも信頼できる存在である人々が出現する。その人々は子どもたちにとって重要な支えの提供者として認識されていると考えられる。第1円にどのような人々が出現するか、出現する人物は多種多様である。そのため、一人一人の出現のタイプを、出現する人物の種類により分類し、タイプ別に学校適応と関係を検討する。

第1円に出現する人物を8つのタイプに分類し、分類ごとに学校適応の下位尺度得点における平均を算出したものを表2に示す。8つのタイプは、タイプ1：一人親中心、タイプ2：両親中心、タイプ3：両親と祖父母中心、タイプ4：両親と兄弟・姉妹・友だちの割合がほぼ等しい、タイプ5：両親と祖父母と兄弟・姉妹・友だちの割合がほぼ等しい、タイプ6：祖父母中心、タイプ7：兄弟姉妹・友だち中心、タイプ8：家族以外の大人が出現するであった。

コンボイのタイプにより学校適応にどのような差があるかどうかを検討するために、学校適応の下位尺度である、「学業場面」、「先生との関係」、「友達の受容度」、「友達の関係」の各得点をそれぞれ従属変数に、コンボイの8タイプを独立変数として、一要因の分散分析を行った。その結果、それぞれの下位尺度とコンボイの8タイプには有意な差は見られなかった。

しかし、値の大きさから、次のような傾向がうかがわれる。すなわち、「学業場面」、「友だちの受容度」、「友だちとの関係」においては、タイプ5がやや高く、「先生との関係」においては、タイプ6がやや高い。「先生との関係」において次に高いのはタイプ5である。「学業場面」、「友だちとの関係」においては、タイプ5の次に平均が高いのは家族以外の大人が第1円に出現している場合である。「友だちとの関係」においてはタイプ4の平均が高い。

表2 子どものコンボイのタイプ別人数と学校適応の平均と標準偏差 (SD)

タイプ	人数 (%)	学業場面	先生との関係	友達の受容度	友達との関係	合計得点
一人親中心	39 (16)	13.92 (3.95)	13.00 (2.24)	6.18 (1.34)	9.95 (1.82)	43.05 (6.32)
両親中心	35 (14)	14.69 (3.34)	14.06 (1.75)	5.43 (1.22)	10.14 (2.02)	44.31 (5.65)
両親・祖父母中心	19 (8)	13.58 (3.63)	13.84 (2.65)	6.05 (1.51)	9.74 (1.45)	43.21 (6.58)
両親・peer 中心	28 (11)	15.11 (4.21)	13.75 (2.55)	6.04 (1.20)	10.29 (1.88)	45.18 (6.83)
両親・祖父母・peer 中心	14 (6)	16.00 (3.59)	14.14 (2.28)	6.36 (.93)	10.64 (1.08)	47.14 (4.69)
祖父母中心	12 (5)	14.33 (3.89)	14.17 (1.95)	5.50 (1.45)	9.08 (1.73)	43.08 (6.35)
peer 中心	48 (20)	13.67 (4.04)	13.08 (2.93)	6.10 (1.49)	9.88 (1.89)	42.73 (7.01)
家族以外の大人	51 (21)	15.16 (3.18)	13.41 (2.84)	6.20 (1.46)	10.04 (2.10)	44.80 (5.98)
合計	246 (100)	14.48 (3.74)	13.52 (2.52)	6.01 (1.37)	10.00 (1.87)	44.02 (6.33)

*peer は兄弟・姉妹・友だちなど同年代の仲間を意味する。

3. 親のコンボイと子どもの学校適応との関係

親のコンボイの例を図2に示す。ここでは、親のコンボイの特徴を検討し、親のコンボイと子どものコンボイとの関係、親のコンボイと子どもの学校適応との関係を検討する。

(1) 親のコンボイの特徴

子どものコンボイと同様に、第一の同心円には親にとってきわめて親密な人々、特に配偶者や何人かの家族が出現し、親にとって重要な支えの提供者として認識される人と考えられる。第二の同心円には、その他の家族、友人、同僚が出現すると考えられる。

親のコンボイの第1円の出現数は、平均2.89人 (SD=2.16)、1人と3人が最多である。第2円では平均3.17人 (SD=2.40)、一人を最多とし右肩下がりに減少していた。第3円においても平均2.59人 (SD=3.29)、0人、1人を最多とし右肩下がりに減少している。合計人数では、平均8.68人 (SD=5.77) であり、平均的に各円に3人ほどの人が出現している。

親のコンボイ第1円、第2円、第3円と子どものコンボイ第1円、第2円、第3円の出現人数の相関関係を算出したところ、子どもの第3円と親の第3円には有意な相関 ($r=20, p<.01$) がみられた。

(2) 第1円・第2円・第3円の人数と子どもの学校適応との相関

親のコンボイと子どもの学校適応との関係を検討するため、親のコンボイに出現する人数と子どもの学校適応の下位尺度得点との相関係数を算出した。その結果、第1円と第2円に相関 ($r=.42, p<.01$)、第2円と第3円に相関 ($r=.43, p<.01$) がみられた。すなわち、第1円の人数が多い場合、第2円の人数も多くなると考えられる。また、第2円に多くに出現がある場合、第3円にも多くの出現が考えられる。しかし、親のコンボイに出現する人数と子どもの学校適応には相関は見られなかった。

(3) 親のコンボイの第1円のタイプと学校適応との関係

親のコンボイに出現する人たちと子どもの学校適応にどのような関係があるのかを検討するため、親のコンボイの第1円に出現する人たちをタイプ別に分類し、学校適応との関係を検討した。

子どもにとって親が一番大切な存在であるように、親にとっても子どもはもっとも大切な存在であると考えられる。そのため第1円に子どもの出現があるかどうか、また、コンボイのどこかの円に子どもの出現があるかどうか。親が子どもをどのように位置づけているかを検討するため、タイプを4つに分類し、タイプ1：第1円に子どもが出現する、タイプ2：どの円には子どもが出現しない、タイプ3：家族だけが第1円に出現する、タイプ4：家族以外の人だけが第1円に出現するとした。

タイプによる学校適応尺度の差を検討するために、下位尺度の「学業場面」、「先生との関係」、「友だちの受容度」、「友だちとの関係」の得点を従属変数とし、親のコンボイの4タイプを独立変数とした一要因の分散分析を行った。その結果、それぞれの下位尺度にタイプによる有意な差は認められなかった。

考察

本研究では、小学4年生と5年生とその保護者を対象に Kahn & Antonucci (1980)の提唱したコンボイ・モデルを用い、親子のソーシャル・ネットワークを探り、ソーシャル・ネットワークがどのように子どもの学校適応と関係しているかを検討した。コンボイ、すなわち個人のネットワークから社会的支えが与えられたり、受け取られたりすることにより、安定したソーシャル・サポートが得られ、子どもたちが、安定して学校に適応できるのではないかと考えた。

まず、子どものコンボイにおいて、第1円、第2円に出現する人数が多いほど、友だちの受容度は高いことが見いだされた。出現する人の中には、図1のようにおじさん、おばさん、いとこなどもいる。高橋 (2007) によれば、おじやおばと親密であれば、その子ども (いとこ) 同士も親密になる。いとこは最初の同年代の仲間であり、接触の程度によりその関係はその後長く続くと考えられている。このように多様な人々と親しい関係をもつことが子どもにとって有益だと考えられる。

次に、子どものコンボイと親のコンボイにおける相関をみると、この二つのコンボイの関係においても相関は見られなかった。親のコンボイの出現数が多いからといって、子どものコンボイの出現数が多いわけではなく、子どものコンボイの出現数が多いからといって、親のコンボイの出現数が多いわけではない。つまり、子どものコンボイの出現数と親のコンボイの出現数には関係性は認められなかった。

次に、タイプと学校適応との関係からコンボイに両親・祖父母・兄弟・姉妹・友だちが平均的に出現している場合、子どもの学校適応は良いと考えられ、また、祖父母中心の子どもは、先生との関係においていい関係がもてると考えられる。つまり、両親・祖父母・兄弟・友だち・同年代の仲間と世代差のある多くの人の中で育まれることは、学校適応にとって良いと考えられる。ここでも、多様な人々と親しい関係をもつことが子どもにとって有益だと考えられる。高橋 (2007) でも、多数のサポート源を持っている子どもがより良く適応していたと言われるように、家庭・学校・地域という、集団に子ども自ら働きかけたり、働きかけられたりすることにより、社会性 (スキル) が身に付き、家族以外の他のおとなと係わることにより、学業場面での適応がよいと考えられ

る。岡崎(2004)によれば、子どもが生まれて初めて経験する人間関係が親子関係である。松永(2004)によれば、安心して自分を出し、親を頼り、親に甘えられることが、初めて子どもが生活する場である家庭で必要とされる社会性であるといわれている。次に、兄弟がいれば兄弟関係を経験することになる。兄弟との相互作用を基盤にして身に付けた対人関係を形成するスキルが生涯にわたり有効に活用されると言われている。また、4年生、5年生になると家庭以外の外の動きも出てくる時期、いろいろなクラブ活動、地域の活動に参加することにより、家族以外の大人と触れあう機会も増える。そのため、両親・祖父母・兄弟・姉妹・友だち・その他のおとなが平均的に出現する場合、学校適応がよいと考えられる。

以上のことから、子どもが安定した親子関係を基盤に社会性を身につけ、兄弟関係から対人関係を形成するスキルを身につけ、そして親のもつ人間関係から多様な人々と親しい人間関係をもつことは子どもたちの適応にとってたいせつであると考えられる。

【謝辞】 本研究データの収集にあたり、ご協力くださった、小学校の児童のみなさん、保護者のみなさま、先生方、関係者のみなさまに心から感謝いたします。

引用文献

- Bronfenbrenner,U (1979). *The Ecology of Human Development Experiments by Nature and Design* Harvard University Press 磯貝芳郎・福富護(訳)人間発達の生態学—発達心理学への挑戦—川島書房, 1996.
- 福島県教育センター(1994). 研究紀要, 24, 50-51.
- http://www.fks.ed.jp/DB/60000.kiyou/kiyou_vol.024/kiyou_vol24_99/html/00050.html
- 池澤徹也(2005). ソーシャル・サポートとヘルスケアシステム 日本健康心理学会 健康心理学概論 実務教育出版 pp.133-147.
- 伊藤武彦(1985). 生活構造と集団の問題 心理科学, 8 (2), 48.
- Kahn,R.L. , & Antonucci.T.C.(1980). Convoys over the life course: Attachment, roles, and social support. In P. B. Baltes , & O.G.Grim, *Life span development and behavior* , Vol.3. New York : Academic Press. pp.253-286.
- Lewis.M.・高橋恵子(2007). 愛着からソーシャル・ネットワークへ 発達心理学の新展開 新曜社 pp.3-71
- 牧野カツコ(2001). 家族の変化と子どもの育ち 青少年問題, 48 (5), 10-15.
- 松永あけみ(2004). 児童心理 58 (2), 154-159.
- 岡崎有理子・杉井潤子(2004). 青年期のきょうだい関係が社会的スキルおよび自尊感情に与える影響 奈良教育大学紀要, 53 (1), 231-238.
- 鶴 宏史・安藤 忠(2007). 社会・家族の変化と子どもの社会性発達 福祉臨床科学紀要 61-70.
- 所崎泰子・秋山香澄・嶋田洋徳・坂崎雄二(2007). 心理測定尺度集 小学生用学校不適応感尺度 pp.343-347.

Pupils' school adaptation and their social network

Seiko Sato

This study aimed to clarify the social networks of children and parents according to the Convoy Model(Kahn & Antonucci, 1980) and to examine their relationship with children's school adaptation. 261 4th and 5th grade elementary school pupils and 168 parents participated in the study. The results showed that those pupils whose convoys include a wider variety of people, such as parents, grandparents, siblings, friends, and relatives tended to adapt better to school than those with a more limited convoy. However, there is no relationship between the parent's social network and child's school adaptation. It could be possible that the child's perception of his/her parent's social network is more important for the child's adaptation.

(指導教員：青野篤子)